

BPT026-07

会場:201B

時間:5月24日 15:45-16:00

東部アジアにおける新第三紀後半の狭鼻猿類の進化史とその拡散経路 Evolutionary history and dispersal route of catarrhine primates in the late Neogene of Eastern Asia

高井 正成^{1*}

Masanaru Takai^{1*}

¹ 京都大学霊長類研究所

¹ Primate Research Institute, Kyoto Univ.

現生のアジア地域のヒト以外の霊長類は、南アジア及び東南?東アジア地域の温帯?亜熱帯?熱帯地域の森林部を中心に、原猿類のスローリスとメガネザル、旧世界ザル類のマカクとコロブス類、ホミノイド類のテナガザル類とオランウータンが生息している。このうち、狭鼻猿類に含まれるホミノイド類 Hominoidea と旧世界ザル類 Cercopithecoidea (コロブス亜科とオナガザル亜科)の進化史に関して、東アジア各地の霊長類化石を再検討し、現在行われている発掘調査の結果と合わせて検討した。

これまでにみつまっている化石記録から、アジア産のホミノイド類と旧世界ザル類の起源は中新世前半のアフリカ大陸であり、中期中新世以降にユーラシアに侵入してアジア大陸を横断する形で日本や東南アジア諸島にまで分布を拡大したことがわかっている。この二つのグループのうちでは、ホミノイド類が先に適応放散を開始し、後期中新世にユーラシアに進出して、その後中東から南アジアを経由して東アジアにまで到達した。アジア地域の最古のホミノイド化石は、インド・パキスタンの下部シワリク層からみつまっているシバピテクス類であり、その中からギガントピテクスやオランウータンなどが進化したらしい。こういった大型類人猿化石は、南アジア?中国南部の中部中新統?中部更新統からみつまっているが、後期更新統までに東南アジア島嶼部のオランウータン以外は全て絶滅してしまった。中国北部からはホミノイド類の化石が見つからないことから、彼らの拡散経路が南アジアであったことは確実である。また小型類人猿のテナガザル類の進化史は全く不明であり、いつ頃どのような経路で東南アジア地域に達したのかもわかっていない。

一方、旧世界ザル類がユーラシア大陸に侵入したのは後期中新世以降である。最初にコロブス類が、その後中新世末期にオナガザル類がユーラシアに侵入した。東部ユーラシアの化石記録もコロブス類のものが先であり、南アジアのシワリク層からみつまっている後期中新世の化石種が最古のものである。最近ミャンマーの上部中新統/下部鮮新統からコロブス類化石がみつかり、東南アジアのコロブス類の進化に関してあらたな知見をもたらしている。また南シベリアのトランスバイカル地域の中部鮮新統からもコロブス類の化石がみつかり、コロブス類の東方への拡散が南アジア経由ではなく高緯度地域(北方経路)を経由した可能性を示している。また日本の神奈川県の上部鮮新統からみつまっているコロブス類化石の形態は、現生アジア産コロブス類とはあまり近縁ではないという予備的な結果が得られており、コロブス類の進化史の複雑さを物語っている。

アジア地域のオナガザル類の化石は、中国北部榆社の下部鮮新統のマカク化石が最も古いとされているが、この地点からはコロブス類の化石も共産していて、鮮新世前半に比較的高緯度域に旧世界ザル類が生息していたことを示している。一方で、最近中国南部の前期更新世の洞窟堆積物から大量のマカク化石がみつかり、現生マカク種の放散が東南アジアであったことを強く示唆している。またユーラシア各地の鮮新統から大型のオナガザル類化石が報告されているが、現生のマカク類とヒヒ類のどちらの系統に近いのか研究者の見解が別れている。こういった大型化石オナガザル類の産出地点は明らかに高緯度域に偏っており、彼らの拡散ルートが北方経路であった可能性を示唆している。

キーワード: 霊長類, 東アジア, ホミノイド類, 旧世界ザル類, 拡散経路

Keywords: primates, East Asia, hominoids, Old World monkeys, dispersal route